愛媛大学教育学部紀要　第65巻　「幼児教育特集号」　25～34　2018

幼児の粘土遊び表現

―芸術士派遣事業を通して―

美術教育講座（非常勤講師）　長谷川隆子

Infant's clay play expression

—Artist dispatch project—

Takako HASEGAWA

（平成 30 年 9 月 28 日受理）

Ⅰ　はじめに

香川県高松市に自治体独自の保育支援事業として「芸術士派遣事業」が平成 21 年から開始されている。これは、NPO 法人アーキペラゴ[註1]が高松市から事業委託を受け、市内の公立・私立保育所、幼稚園、こども園等に「芸術士®[註2]」と呼ばれる豊かな表現力や専門知識を持ったアーティストを定期的・継続的に派遣し、保育教育士・幼稚園教諭と連携しながら保育実践に従事するというものである。

近年注目を集めているイタリアの「レッジョ・エミリア・アプローチ[註3]」という幼児教育の考え方を参考にスタートしたこの取り組みは全国的にも初めてで、保育や教育の枠にとどまらず、地域・社会を巻き込んだまちづくりに発展している。今後は、そうした地域・社会が、子どもたち個々の個性を育み、感性豊かに育つことを保障するような環境になっていくのではないかと考えている。

Ⅰ-１　芸術士派遣事業の概要について

瀬戸内国際芸術祭 2010 が開催される前年、高松市をはじめ香川県全体が、芸術文化のまちづくりを目指し動き出した頃､国の雇用創出制度｢緊急雇用創出基金事業[註4]」と､｢ふるさと再生特別基金事業[註5]」が始まり、アーキペラゴは「高松市内の保育所に通う子どもたちは、みな平等に芸術士と創造的な表現活動を体験できる」という夢のような『芸術士派遣事業』の企画を打ち出した。｢創造的人材が活躍できる芸術士という仕事作り｣｢そこで育つ子どもたちに対する将来へ投資」という目標のもと、地域の理解と予算の確保が固まりプロジェクト実現となった経緯である。芸術士派遣事業は当初、国の緊急雇用創出等の期限付きの事業だったものの、期間終了後は市の独自財源を用いることにより、現在、芸術士は 24 人に増え、高松市内 43 施設の保育所・こども園・幼稚園（平成 30 年４月現在）で継続実施されている。

また、アーキペラゴ自主事業「芸術士プラス[註6]」として高松市派遣委託対象外の地域からも依頼を受け、坂出市、観音寺市、さぬき市、三豊市、四国中央市、徳島市、岡山市にも広がっている。筆者も「芸術士」として、４年前から三豊市、観音寺市、四国中央市などの保育施設へ訪問している。

Ⅰ－２　芸術士とは

芸術士は、絵画、彫刻、染色、身体表現、ファッションなど、専門や経歴はさまざまで現在も創作活動を続けている現役のアーティストであり、いわゆるアートを教える外部講師や単発で子どもに関わるアーティストとは

異なり、１年を通じて、保育者とともに子どもたちの活動を見守り、支え、豊かな感性を育てていく役割を果たしている。

多様な実践の中で、芸術士は、下記の４つのミッションを掲げている。

【結果を求めない】
大人の求めている結果が、子どもたちにとっての正解とは限らない。結果ではなく、過程を大切にしている。
【子どもたちのサポーター】
子どもたちそれぞれの個性を尊重し、自らが考え、工夫し、伝える力を引き出すサポートをする。
【子どもたちの”こころ”と”からだを大切にする】
探究心を求められる環境を整え、想像力・創造力を引き出す手助けする。
【子どもたちと社会をつなぐ】
ドキュメントの制作（II ドキュメントの項目で説明）

園における芸術士は、制作活動に関わる主活動はもちろん、給食を一緒に食べる、園庭で一緒に遊ぶ、散歩に出かける、というように１日を通して子どもたちと一緒に過ごしている。それは、子どもの目線に立ち、普段の生活に寄り添うことで、子どもたちと向き合い、可能性を信頼し、また子どもたちも芸術士という「大人」を受け入れてくれ活動の発展を支えていく土壌となっている。

II　ドキュメント　−実践記録−

芸術士は、毎回、子どもたちの活動や発言を写真や文章で綴った活動記録をドキュメントとして整理している。ここでも、このドキュメントは結果の記録ではなく、子どもたちの変化の過程を記録するものとして位置付けられる。その日の出来事を保育者と共に振り返ることもまた重要だと考えているからである。園に掲示されたドキュメントは、保護者と子どもが何に興味を持ち、どう活動しているかを共有するために、また子どもたち自身も学びの振り返りのために使われる。これは、単なるこどもたちの活動の記録ではなく、一般にも公開し、 子どもたちと社会をつなぎ、社会の中で価値ある存在であることを示している。

II − 1 土粘土について

筆者の芸術士活動の中から特に自然の素材「土粘土遊び」の実践記録をいくつか紹介する。土粘土は、幼少期に積極的に触らせたい素材である。器、お皿などを作る陶土と同じであるが、ここでは「ものづくりのための材料」ではなく、全身で感触を楽しめる「遊びの素材」として使用する。

自然界にある色、形には、同じものは一つもなく無限大である。触った感じ（テクスチャー）もざらざらやツルツル、温かい冷たいなど多様。そして自然素材はセラピーの効果があるため、子どもは気持ちよく夢中になれる。特に「土」は、もっとも身近でどこにでもある。土に水を混ぜて泥だんごや泥で絵も描ける。その中でも「土粘土」はプリミティブで安全な上、イメージを形に表しやすい性質があり、子どもたちが受け身の立場ではなく、自分なりのアプローチで取り組み、好奇心や探究心を高め、いろいろな遊びへと展開しやすい魅力的な素材である。

しかし、汚れる、後始末が大変、粘土の保管など、取り扱い方に専門的な知識や経験を必要とすることから敬遠されがちになり、保育現場で土粘土での活動を行っている園は少ないと言える。実際、扱ったことがないという保育者も多い。しかし筆者は、毎年、各園で必ず大量の粘土による表現活動を行っている。子どもたちはもちろん保育者も一緒に遊び、自然の一部と関わりを持つ事で感情を表出し、心を解放させてくれる大切な時間になっているといえよう。

活動実施日と参加施設は以下の通りである。平成２７年から４年間、芸術士活動として「土粘土遊び」の実践を行った。

・平成２７年６月　香川県三豊市立財田幼稚園
　（５歳児　２７名）
・平成２８年７月　香川県三豊市立財田保育所
　（３歳児　１７名）
・平成２８年９月　愛媛県四国中央市立上分保育園
　（２歳児８名、３歳児１４名、４歳児１３名、
　　５歳児１６名　計５１名）
・平成２９年５月　愛媛県四国中央市立松柏保育園

（３歳児２０名、４歳児２０名、５歳児２９名
計６９名）
・平成２９年６月　香川県三豊市立高瀬南部保育所
（３歳児３３名、４歳児１０名　計４３名）
・平成２９年７月　香川県三豊市めみか保育園
（２歳児６名、３歳児５名、４歳児１名　計１２名）
・平成３０年８月　愛媛県四国中央市立中曽根保育園
（１歳児１０名、２歳児１２名、３歳児３０名、
４歳児３２名、５歳児２８名　計１１２名　）
・平成３０年８月　香川県三豊市めみか保育園
（３歳児６名、４歳児６名、５歳児１名　計１３名）

なお上記には、論文中に写真の掲載のある園のみを記載した[註7]。

土粘土を用いるためには環境設定が必要である。

まず園児数に応じて、活動スペースの広さ（屋内または屋外）、土粘土の量、活動後の洗い場への導線など環境設定は保育者と確認しておく必要がある。例えば、園児52名に対し、屋外でテント３棟にブルーシート、コンパネ８枚を敷いた。（テラスや屋内の場合は、ブルーシートのみで可）土粘土は65kg（1人1kg×人数＋10kg）程度を目安に用意した。特に注意していたのは土粘土の柔らかさである。事前に、滑らかで使いやすい耳たぶくらいの固さの状態になるよう練り上げておく。また、土粘土はきめが細く子どもたちの肌に直接触れるため、砂や石が入らないように気をつけたい。

活動の際、素材の扱い方など最低限の説明はするが、保育者や芸術士が、作るものや作り方を細く指示することはない。表現活動は、子どもたちにとって「楽しむこと」である。

II － ２ 土粘土で遊ぶ

大量の粘土は、ボリューム感が出るよう山型に置き、「大きさ」を視覚的に体感させるようにした。普段の視野の範囲を超えたシチュエーションは、立体的なものや広い空間を見る体験になると考えたためである。

土粘土の特徴や注意点を話した後、そこから１人ずつにひとかたまり１kg程度を手渡すと、子どもたちは目を閉じて「冷たい」「重たい」感触を確かめている。視覚を閉じることで、触覚に集中させる狙いがあるのである。そうして子どもたちは、「わ！」と、ふらつきながらでも、しっかりと抱えようとしている。

それから、どしーんと下に落とすとパシンッと大きな音が響き「重さ」を耳（聴覚）でも感じる（写真１）。まさにそうすることで、自然の土の匂い（嗅覚）も刺激されるのである。

写真１
上から落としている様子（香川、めみか保育園）

子どもたちは、つぶれた粘土の上に乗り、足の裏でも「冷たさ」の感触を確かめる。足で踏み始めると「冷たい！」「きもちわる～い」「ドロドロする～」と、指の間からぐにゃりと動く様子やペチャンコになった様子を見て笑い合っている。手よりも足で踏むほうが、つるっと冷たい感触が敏感に感じ取れるようで、足踏みをしたり、飛んだり、走ったり、自由に動き、子どもたちの好奇心はどんどん高まっていくのである。

そうして（写真２・３・４・５）のように、子どもたちのなかには、手で触りたくてうずうずしてきた様子が見受けられる。目の前の粘土を床からはがし、丸めて持ち上げる、触覚的な刺激を受け、何か作りたいという意欲が出てくる、など。もちろん、はじめて土粘土に触れる子どもの中には、汚れることを嫌う子も当然いる。しかし一つの取り組みとして、上記で紹介したように、敢えてはじめは手で触らず、足で踏んだり、床に叩きつけたりという行為を導入として組み込んでみると、抵抗なく触れやすいようであった。

ひとかたまりの粘土から、とったり、つけたり、細くしたり、触れた手の動きそのままに形を変えることが自由にできる可塑性、粘着性を併せもつため、子どもたちは造形に取り組みやすい。はじめは丸めてまん丸を作る子が多く、おにぎりやケーキ、ドーナツなど食べ物屋さんのごっこ遊びをしたり、うさぎやライオン、ゾウなど動物、いろいろな造形を楽しむ。また、足に貼り付けて靴を作ったり、指で穴を開けてお面を作ったり、自分の膝からまん丸の粘土を転がして滑り台にしたり、粘土を泥パックのように自分の体に塗りたくりはじめる子も多い。冷たい土が手のぬくもりで温められて柔らかくなっていくことも実感でき、泥んこになって汚れることがだんだん気持ちよさに変わっていくようである。

写真２

粘土を小さくちぎって並べる（香川、めみか保育園）

写真３

粘土の靴（香川、高瀬南部保育所）

写真４

指で穴を開けてお面（香川、財田保育所）

写真５

膝から粘土のまん丸を転がす（香川、財田保育所）

土粘土は他の粘土と比べると、安価で入手しやすいのもメリットである。

油粘土、紙粘土など粘土ケースに収まる量とは違い、子ども１人ひとりに十分な量を用意できるので、惜しみなく作っては壊し、作っては壊し、ひとつの形がとどまることなく、何度でもやり直すことができ、自由自在に七変化していく。

どんどん重ねて大きくして身体ごと乗っかかるような質量を活かしたダイナミックに遊びが展開されていくこともある（写真６）。

写真６
粘土に体当たり（愛媛、松柏保育園）

II － ３　土の島渡り

子どもたちを観察し、子どもたちとの対話の中からプロジェクトが生まれるということがある。

ダイナミックな遊びの中から生まれた「土の島渡り」の遊び。床に置いた粘土を子どもたちが飛びはねては、次の粘土へ移動し、それを見た子どもたちがまた真似をする、ということをしていたので、一旦、粘土を整理し、庭の飛び石のように配置した。ブルーシートは海、粘土は島に見立てて、子どもたちが順番に渡っていくという環境を作った。「島から落ちるとワニが食べちゃうぞ！」と途中待ち構えていると、子どもたちは「きゃーきゃー」と、大騒ぎで渡っていく。体を思いっきり使って、バランス感覚と足から伝わる感触が面白く何度も、何度も並んで挑戦する。はじめは慎重におそるおそる渡り、慣れてくると「きょうそうしよや」と、速さを競い、片足渡りやカエル飛び渡りなどに遊びが展開されていく。パーソナルな粘土遊びから、グループへの活動と広がった。待っている子たちも「がんばれ！」と掛け声をかけ、クラス全体が大盛り上がりになる。当然、粘土は踏むたびに、ぐにょぐにょと形が変わり、毎回うまく渡れるとは限らない。粘土の大きさや高さ、間隔を変えるだけで、難易度が変わる点もおもしろさのひとつである（写真　７）（写真８）。

写真７
土の島渡り　（香川、財田保育所）

写真８
土の島渡り　（愛媛、上分保育園）

II － 4　土の建築

何度か土粘土を経験した子どもたちには、何かしらの道具を用意しておく。今回は、紙菅（長さ 1m くらい）（両側の穴はガムテープで粘土が入らないように塞いでおく）を用意する。５歳児の 30 名で 20 本くらい、３歳児がいる場合はラップの芯くらいのサイズも手頃で使いやすい。軽くて倒れても安全な素材を選びたい。紙菅は、絵画制作でよく使われるロール画用紙の芯に入っているので、比較的、園でも集めやすく、紙という点で処分も容易である。また、途中で折り曲げたりすることもできる。複数あれば、紙菅同士を粘土でつなぎ、自分の身長を越すくらい大型のものを組み立てることが出来る（写真９）。

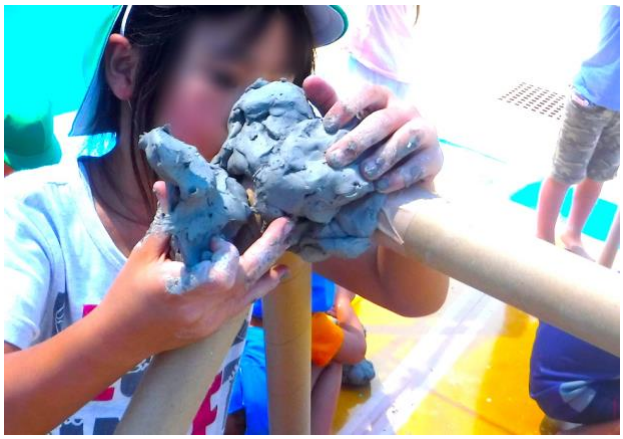

写真９
紙管を粘土でくっつける（愛媛、中曽根保育園）

紙菅を持つ係、粘土を持つ係、指示する係、1 人では組み立てることは難しく「友だちと協力する」ことが重要になってくる。一目散に紙菅を取ってくると「よし、ここもっといて」「ねんどつけて」と互いに声をかけながらやってみようとする。ハの字にくっつけたり、テントのような形にしたり、工夫する姿が見られる。基礎（土台）が弱いとたちまち崩れ落ちてしまい、「なんでくずれたん？」「ここをこうしたほうがええんじゃない？」子どもたちはめげることなく、より考え、力を合わせ「よし！もっかい」「こっちとつなげよう」と目を輝かせる。そうして作った、大きな門（ゲート）を潜り抜けるとみんなやりきった顔をしている（写真１０）（写真１１）。床での遊びから高さが生まれ、子どもたちの目線も広がり空間全体での遊びになった。

写真１０
協力して組み立てる（香川、財田幼稚園）

写真１１
粘土のゲートをくぐる（香川、めみか保育園）

II － ５　コケザウルス誕生

香川県三豊市立高瀬南部保育所の土粘土の実践でのエピソードを紹介する。自然豊かな環境で、テラスからも緑の山が見えていた。活動が終わる頃、粘土との別れに悲しそうな子どもたち。「ねんどは、あのやまからきたんよな」山を見上げ、また１カ所に集められた粘土を見て「ねんどのかみさまみたいなんおるんかな」と子どもたちが口々に話しはじめた。それから「目」を作りだし、「口」はこんなかんじ。「とさかもあるで」「かいじゅうみたいなん」「はねもある」と、どんどん想像がふくらんでいく。大きな丸い目に長いくちばし。小さな羽根は飛べないらしい。尻尾もあるとか。ニワトリみたいな特徴と強いイメージから「コケザウルス」と命名した粘土の神様が生まれた（写真１２）。

写真１２
コケザウルス誕生（香川、高瀬南部保育所）

II － ６　新たなコケザウルス

土粘土遊びで生まれた粘土の神様「コケザウルス」。土粘土作品は長期的な保存は難しいので、その後「コケザウルスは山に帰るんよ」と、お別れをした。「じゃあ、またコケザウルス作ろうよ」と、話すと「ほんと？つくりたい！」と、子どもたちの目はまた輝きだした。このように、芸術士は、いつも子どもたちに真剣に向き合い、どうリスポンスするか、子どもたちの興味をどう掘り下げていくかを考えているのである。

さて、この２日間の活動では「コケザウルス」を大きな立体作品にしていくことにした。チームワークを大切にし、グループによるプロジェクト制作を行うことで、自分の役割を学び、自主性や協調性、交渉力などを学ぶきっかけになると考えたためである。

１日目では、まず張り子の要領で作るが、芯材を使わず新聞紙のみで作る方法にした。そこでは、毎日読んでは捨てるだけの新聞紙は立派な材料になる。子どもたちは、１枚では破れてしまう新聞紙も丸めたり、何重にも重ねたりすると丈夫になる、さらにのりで貼っていくと木のように強くなるという、紙の性質の変化を学ぶ。見本にかためておいた新聞紙のかたまりを叩いて「カチカチや～」と、驚く子どもたち。ちょっと叩いたくらいでは壊れる心配もないほどの強度である。

１ 人ひとりの思いが詰まったものにするべく、１人１つ抱きかかれる大きさ３０㎝程度のかたまりを新聞紙で丸めて作る。作り方は、新聞紙４枚を使用。まず３枚をそれぞれギュギュッと固めに丸める。新聞紙１枚は、丸めるにはちょうど良いサイズで「ぎゅーってしたら、きれいなまん丸になるんで」と、力いっぱい込めて作る。残りの１枚で３個の丸めた新聞を包む。「丸める」「包む」という大人にとっては簡単な作業が、子どもたちにとっては体を使った大作業であり、お弁当のような、プレゼントのような、卵のような形は・・・「これな～、コケザウルスの赤ちゃん（卵）。」「卵いっぱいになった。」物語が生まれるきっかけになる、意味を成した行為になっていく。（写真１３）

写真１３
新聞の卵がいっぱい（香川、高瀬南部保育所）

コケザウルスの「体」「頭」「しっぽ」「はね」の４グループに分かれ、丸めた新聞紙（以下、新聞の卵）を友だちの新聞の卵とセロハンテープで貼り合わせ、形を整えていく。丸い小さな新聞の卵は、だんだんと形を表していく。「体」は、とても大きく、まとめるのが一苦労だが、ヒモでしっかり縛っていき、帯状にした新聞紙を巻きつけていく。子どもたちはまるで格闘しているように全身を使い、押したり引っ張ったり支えたり「コケザウルスを作るんだ！」という強い思いを互いに共感し作りあげた。丸めた新聞を子どもたちが「卵」と見立て、コケザウルスのお腹の中には、子どもたち１人ずつの卵が入っていることもドラマチックな要素となった（写真１４）。

写真１４
全身を使い、形を作っていく（香川、高瀬南部保育所）

２日目では、チームに分かれ制作した。
＜和紙を貼るチーム＞
コケザウルスの「体」「頭」「しっぽ」「はね」のパーツを、のり（でんぷんのり、洗濯のり PVA、水を混ぜたもの）をハケでまんべんなく塗り、事前によく揉んで柔らかくしておいた和紙（奉書紙）を貼り、またのりを塗る…という作業を繰り返す。何層も貼ると強度が増すが、中に新聞紙が詰まっている点や厚手の和紙である点から、二重貼りほどで充分な強度に仕上がる。のりが少ないと和紙がくっつきにくく、のりが多すぎるとべたべするので、濃度の調整が難しいところではあったが「ここ、のりぬって」「わし はれるよ」と、作業を通していつの間にか協調して動くことができていた（写真１５）。

写真１５
ハケを使い和紙を貼る（香川、高瀬南部保育所）

＜お花紙をちぎるチーム＞
和紙が貼れた後、コケザウルスの体を彩るお花紙をみんなで小さくちぎる。いくつか色のデザイン案を出し、子どもたちと話し合い、体はピンク系、羽根はブルー系と決めた。同じくらいの大きさにするため、事前に帯状に切っておいたので、重ねてちぎっていくこともできたのだが、１枚ずつ手にとってそろりとちぎっていく子もいた。小さいかけらの淡い色が積み重なるとお花畑のようでとてもきれいで、女の子たちは花摘みをしているような光景だった。

高い位置からお花紙を散らすとひらひらと空に舞い、コケザウルスの体にもくっつく。ふーっと息でふいたり、上から散らしたり、たくさん集めたり遊びながら、きゃーきゃーと、笑顔の子どもたち。いつのまにかコケザウルスも色とりどりになって「花吹雪」の中から生まれてきたようだった。ふわふわのお花紙は鳥の羽根のようにも見える（写真１６）。「ひらひらのおやまからきたんよ」「おはなのおぼうしつくってあげるな」といい、わたしの頭にもひらひらとのせてくれる。
宝石のようなグリーンの目も付き、コケザウルスは保育所の玄関で毎日子どもたちを見守っているのである（写真１７）。

写真１６
ひらひらとお花紙をちらす（香川、高瀬南部保育所）

写真１７
子どもたちを見守るコケザウルス（香川、高瀬南部保育所）

III　おわりに

レッジョ・エミリア・アプローチの創始者、ローリス・マラグッツィは次のように言っている。

『子どもたちは、ものごとを表現するのに百通りの言葉を持っていると言えます。すべての子どもは、豊かな可能性、潜在力、表現力を持って生まれてきます。[註8]』

『私たちにとっての”子ども”のイメージとは、強く、活気にあふれ、豊かな能力を持ち、他の子どもや、大人とつながることを強く求めている、そういう存在です。彼らはものごとを観察し、経験を蓄積し、仮設を立て、答えを導き出し、それを通じて、この世界とつながる能力を備えているのです。[註9]』

子どもたちが表現する方法は言葉だけではない。歌うこと、踊ること、絵を描くこと等も同様の方法であり、そこで子どもたちの創造力は無限に広がるといえよう。芸術表現は、言葉や遊びの延長として、心の状態や興味関心を発信し、また感じ取ることができるものである。子どもたちは自分が知っていること､理解していること、疑問に思っていること、不思議に思っていること、感じていることなどを、自らの生きる世界に向けて精一杯伝えようとしている。芸術士は、このような子どもの姿やその世界を見守り支援していく存在であり、今後も多くの子どもたちの個性と未来の芽を育む存在でありたい。

謝辞

日頃から芸術士活動に多大なるご理解くださりありがとうございます。香川県三豊市立財田幼稚園、三豊市立財田保育所、愛媛県四国中央市立上分保育園、四国中央市立松柏保育園、四国中央市立中曽根保育園、社会福祉法人花みずき福祉会　めみか保育園､香川県三豊市立高瀬南部保育所の所長先生､園長先生はじめ､すべての職員、保育士の皆さま、保護者の皆さま、芸術士活動にご賛同下さった、まちづくり推進隊財田、四国中央市役所こども課の関係者の皆さま､深く感謝とお礼を申し上げます。そして､いつも元気いっぱいパワーをくれる子どもたち、幼稚園を巣立っていった子どもたち、みなさんありがとう。

註および引用文献

（１）まちづくりや環境保全活動などを行う団体。芸術士派遣事業の他、瀬戸内国際芸術祭の応援活動、島のビーチコーミング・クリン活動の企画運営、漆の家プロジェクトの事務局活動、豊島ゼミなどを行っている。

（２）平成 25 年に NPO 法人アーキペラゴと高松市が商標登録を取得。

（３）イタリアのレッジョ・エミリア市発祥の幼児教育実践法。個々の意思を大切にしながら、子どもの表現力やコミュニケーション能力、探究心、考える力などを養うのを目的としています。1991 年に”世界で最も優れた 10 の学校”に選ばれた学校が実践していたことから、世界的に有名になった。

（４）地域の雇用失業情勢が厳しい中で、離職した失業者等の雇用機会を創出するため、各都道府県に基金を造成し、地域の実情や創意工夫に基づき、雇用の受け皿を創り出す事業。

（５）地域の創意工夫で、地域の求職者等が継続的に働く場を創り出す事業。

（６）アーキペラゴ自主事業で、高松市派遣委託対象外の保育施設が対象。派遣回数は、週１回、月１回、月２回など異なる。施設独自の予算や、ふるさとまちづくりなどから予算が組まれている。

（７）写真掲載については、施設及び保護者から同意を得ている。

（８）アレッサンドラ・ミラーニ（水沢透訳）『レッジョ・アプローチ　世界で最も注目される幼児教育』文藝春秋 2017 p46

（９）ミラーニ 前掲書 pp.51-52

参考文献

・『新幼児と保育　2018 6/7 月号』（幼児期にこそ体験してほしい　どろんこ遊びｐ３０～３４）小学館

・『子どもとアート　新幼児と保育編集』小学館　2013

・前島英樹『幼児造形教育のための粘土場による実践』2007 順正短期大学研究紀要　第 36 号

・松本博雄　『現代と保育 92 号（みんなでつくる保育の未来）』ひとなる書房　2015

・小串里子『みんなのアートワークショップ（子どもの造形からアートへ）』武蔵野美術大学出版局　2011

・山本理絵編著　加藤繁美監修『子どもとつくる５歳児保育』（５歳児と楽しむアート体験 p98,99 太田絵美子　NPO 法人アーキペラゴ ）ひとなる書房　2016

・斎藤政子編著　加藤繁美監修『子どもとつくる５歳児保育』（４歳児と楽しむアート体験 p118,119 太田絵美子　NPO 法人アーキペラゴ ）ひとなる書房 2016

・NPO 法人アーキペラゴ 代表理事三井文博『芸術士って？なにするひと？』百十四経済研究所　調査月報 No,373　2018

・芸術士活動報告『きょうなにするん展』2016,2017 発行 NPO 法人アーキペラゴ

・芸術士プラス活動報告『きょうなにするん』2016 発行 NPO 法人アーキペラゴ

・佐藤学監修　ワタリウム美術館編　『驚くべき学びの世界　レッジョ・エミリアの幼児教育』東京カレンダー2011

・レッジョ・チルドレン著　ワタリウム美術館編　『子どもたちの１００の言葉　レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』日東書院　2012

web page

・『芸術士のいる保育所』
http://geijyutsushi.archipelago.or.jp
（平成 30 年 9 月 5 日アクセス）

・『チャイルドリサーチネット』
https://www.blog.crn.or.jp/lab/01/53.html
（平成 30 年 9 月 10 日アクセス）

・『KODOMO EDU　こどものためにできること』
https://kodomo-edu.com
（平成 30 年 9 月 10 日アクセス）